

Amazon 紹介文

この社会はどのようにして、現在のようなかたちになったのか？
敗戦、ヤミ市、復興、高度成長、「一億総中流」、
バブル景気、日本経済の再編成、アンダークラスの出現……
「格差」から見えてくる戦後日本のすがたとは――
根拠なき格差論議に終止符を打った名著『「格差」の戦後史』を、
10年の時を経て、新データも加えながら大幅に増補改訂。
日本社会を論じるならこの一冊から。

著者 橋本 健二

1959年生まれ。早稲田大学人間科学学術院教授（社会学）。データを駆使して日本社会の階級構造を浮き彫りにする。『はじまりの戦後日本』『新・日本の階級社会』『アンダークラス』など。

本書の紹介

著者は私より少し若い早稲田大学の教授。戦後社会構造の変遷を格差と階級というキーワードで様々な時代の風俗や文化の変化も織り込みながら「SSM調査データ」という社会調査の結果を多くの文化、芸術作品も交えながら世相を語る手法に学術的ではないとの批判も一部の書評にあるが、私は同時代人として興味深く感じた。

先ずは戦後の華族制度の廃止から、新たな階級転換、高度成長、ホワイトカラーとブルーカラーの姿、20世紀末からの階級の固定化とアンダークラスと称する貧困層の増大について、実に上手く分析していると感じた。

私事になるが、私が大学（某国立）に入学したのは1974年、オイルショックが終わろうとしていた時代であるが、その当時は全国各地から多様な方が在学していた。学生運動は終わり平和な時代でもあった。本書は、親から子の世代への階級転換を分析しているが、その当時の学生は、新旧の中間層、地方の農家の出身者が大半であったと記憶している。ただ、労働者層は少なかった。

既にクルマ社会ではあったが、クルマを利用する学生も極僅かであり、特別の富裕層も見られなかった。ただ、一部の良家の子女が通うと言われた私学では、既に学生のクルマ利用が大学近辺の不法駐車問題も起こしていた。

現在の国公立大学の学費（年額）が50万円を超え60万になったとの報道を耳にすると驚くばかりである。当時の授業料は月3000円、私鉄の初乗りが60円程度の時代だが、やはり割安であり、アルバイトの稼ぎは、下宿生は生活費の一部、自宅通学者の多くはもっぱら遊興（旅行費用等）に充てるというのが普通の生活スタイルであった。宿生の多くは木賃アパートに居住したが、本書にもあるように現在

よりは機会平等であった。あくまでも私の周辺の学生の姿だけかもしれない点をご容赦願いたい。

卒業後、大半の学生はホワイトカラー、新中間層に所属することになる。まさに、大卒というブランドを入手すれば、どのような階級出身でも新中間層の仲間入りができたということだ。

今、大学入試には特殊な試験対策が求められ費用が発生する。このため親の所得が学歴に影響すると言われているが、この時代はまだ、家庭事情で受験に専念できない環境にない限り、その必要はあまりなかったのではないか。ただ、一部に一流の家庭教師の力を借りるものもいたらしい。時代は違うが、家庭教師の力で医学部に入学したと豪語する女性医師タレントもいるし、与野党を問わず政治家の子弟に超一流の家庭教師がついたこともよく耳にする。

さて、本書ではホワイトカラーとブルーカラーについて論じているが、戦後、その格差が縮小したことが述べられている。これは私の会社員生活でも感じたことである。ブルーカラーにもマニュアル職でない経営管理職登用もあるし、福利厚生などは平等であった。これは、会社組織が一体感を持つ必要があったことに起因している。このホワイトとブルーの間は大企業ほど小さくなったのではないかと感じている。ただし、役員となると少し事情は異なっている。役員の特権化は近年著しい。

学歴による区分も大卒者の増大もあり公正であるかとの論議もあるが、資格試験が導入され大卒が必ず昇進するという制度も崩壊してきている。ただ、某巨大自動車メーカーは社員の親睦組織、厚生施設も区別していると聞いたことあるが、大半の大企業では正規社員であれば、現場か本社勤務であるかは別としてもそれなりの賃金が保証される場合が多かったのではないか。

一方、ホワイトとブルーの区分が解消する中、一貫して、巨大工場の製造現場は、古くは臨時工、現在は派遣労働者によって担われてきている。彼らは低賃金で危険な労働に従事する。これは現場労働の排除が労使（ブルーとホワイト）の暗黙の合意であったのではないか。ここに労働組合の貴族化の姿がある。私はまだロボットが導入されていない時代に、電機メーカーと自動車工場の製造ラインを見学する機会があったが、過酷な労働の姿に驚いたことが記憶に残っている。

このような中、正規と非正規に加え発注者と請負との格差は拡大している。例示ではあるが、コンビニでの本社の若手スタッフが店舗オーナーを顎で使う姿が目につく。ただ、前者は論じられるが、後者については公正取引という観点でしか注視されない。発注者の力は絶大であり、年齢、学歴、キャリアを超えたものとなる。協力会社という美名で語られるが、その本質は国際競争圧力などの中で厳しくなった経営環境が背景にある。

余談だが、現在、大企業では、大卒者の採用時の身分承諾があるようだ。総合職、一般職といった分類だが、現業部門の多い鉄道会社では「鉄道職」という現業採用もある。国家公務員のキャリアとノンキャリアの区別のようなものであろうか。ただし、この「鉄道職」も中小事業者の経営層よりは安定した生活を享受できていた。

アンダークラスの比率は子供の貧困率と一致している。特に離死別した女性非正規層の貧困化は目を覆う。コロナ禍で感じたのは、貧困を排除した社会を再構築しないと社会を維持できないということである。貧困を自己責任としたり、存在そのものを否定するようでは、危機に直面した際に社会の安定性が失われ崩壊するということである。かつての保守派はその認識があったのではないか。

最後に、阪神大震災では死亡率が、生活保護世帯が一般世帯の5倍であったという。これは住環境によるものだが、私の出身大学の後輩も多く無くなっている。木造家屋の下敷きとなり焼け死んだ者もいる。一方、豊かな学生は鉄筋のワンルームマンションで禍を逃れている。命も金次第であってはならない。

前世紀末から一億総中流という言葉を使いながら様々な規制緩和が行われ、貧困が広がり格差が拡大してきているが、コロナ禍を克服した新たな社会のあり方を考える一冊であると思う。

池田昌博

